

加藤家文書にみる咄家の流行唄

北川 博子

大阪商業大学商業史博物館には「近世大坂の商業」に関連した資料が豊富に収められている。今回、『大阪商業大学商業史研究所資料目録』を順次見せていただいたところ、筆者が専門とする近世上方の芸能や文学、浮世絵に関連する資料が散見された。そして、寄席で咄家が歌った流行唄を版行した薄物唄本を二種、加藤家文書の中に見出したので、ここにその紹介と翻刻を行いたい。

加藤家文書については『大阪商業大学商業史研究所資料目録 第三集』（一九九七年、大阪商業大学商業史研究所刊）があり、池田治司氏の詳細な解説が付されている。池田氏の解説によると、加藤家は現在も続く家柄で、江戸時代には河内国若江郡御厨村の庄屋を務めていたという。博物館は、同家に伝来した文書約一万点余りを昭和五十六年末から翌年七月にかけて直接購入している。目録をざっと見たとこ

ろ、加藤家の人々が特段に芸能や絵画に興味を持った形跡は見受けられなかった。その中では、今回紹介する薄物唄本は珍しいものといえよう。

これら薄物唄本は、その内容から刊年が安政二年（一八五五）であることが確定できる。目録の解説には池田氏作成の家系図があり、また、今回改めて氏に口頭で質問したところ、当時の当主は、勘左衛門（明治九年（一八七六）没）とその子後兵衛（元治元年（一八六四）没）、ともに可能性があるとのこと。さらに、この頃は事情があつて、勘左衛門は南隣村である下小坂村の兼任庄屋もしているので、実質的に御厨村の奥方は後兵衛が任されていたかのもしれない、とのご教示をいただいた。勘左衛門の妻しうは嘉永期に没しているので、安政期にこの薄物唄本を手に入れることができたのは、勘左衛門が後

兵衛、そして後兵衛の妻ひさ（明治二十年（一八八八）没）、弘化三年（一八四六）に河内郡吉田村源左衛門方より勘左衛門が養女として引き取ったよね（文久元年（一八一六）没）ということになるのか。

それでは、薄物唄本に話を移すことにしよう。筆者はかつて、勤務先である阪急学園池田文庫で未整理であった薄物三四三点の整理を行い、『薄物唄本目録』（一九九三年、阪急学園池田文庫刊）の作成に従事した経験がある。薄物とは、判型が半紙本、中本、小本で、丁数が数丁のものを指す形態上の名称である。唄本とはいっても、この形態の出版物は実に様々で、流行唄の他にも教訓や遊技、落咄なども含まれていたもので、「薄物唄本」は目録作成上の仮の名前であった。

しかし、ここに紹介するのは真正正銘「薄物唄本」である。幕末、上方の寄席では、咄家が流行唄を生み出していた。そして、それらは薄物や一枚摺となって出版されていたのである。このことについては、荻田清氏の「上方の咄家と天保・幕末期の流行唄（上）（下）」（一九八六年一月・六月刊、『芸能史研究』九二・九四号）に詳しく、特に（上）は今回紹介する薄物類についてのご論考である。咄家の薄物唄本は、伊予節、とつちりとん節、よしこの節、大津絵節、あほだら経などが多いが、その他にもたくさんのお節がある。今回紹介するのは、その他の○○節である。基本の形態は小本四丁、共表紙で一丁表は絵入の表紙で、その裏から本文が始まっている。また、唄の最後に同様の合いの手が入ることが多く、例えば『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』は、「みな〜まるふて よし〜」、「鯛づくし事

上の関ぶし』は、間に「たいよかたい」、最後に「たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい」である。それでは、次に書誌情報と翻刻を記しておこう。

【所蔵番号】加藤家文書 A-8 2979-5

【書名】『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』

【形態】小本一冊（十四・六×十・九cm）

【行丁数】八行四丁（一丁表、四丁表を除く）

【丁付】なし



【版元】堀江稻荷御旅前 歌久

【作者】月亭生瀨

【備考】四丁表に「下」とあるが、三丁表から「下」となるものが多い。丁付もないので綴じ間違った可能性も考えられる。

【翻刻】

堀江いなりおたびまへ 歌ひさ板

月亭生瀨新戯作

大新ばん 芝居よし〜ぶし事 因州^{いんしゅう}ぶし 二上り 上(二丁表)

▲そも〜これは宇田天王 くだらぬこひの大将軍 たいらのきよをかふきやうか してみにやわからぬゑぞうし さつても心がつかれだし だしたつぶりちばみのごどもしゆがちにつきかねるに 上 よし
 〳 世のまるふて 上 よし〜よし〜

▲ねんこふあんせいとあらたまりて 卯のとしがさね二めでたきは これからいつもほつねんで 〳〳〳〳もます〜みいりよく ひやうの 中おもふて 上 よし〜〳〳〳〳(二丁裏)

▲けものつくしで大キナものは うさきのみ〜にしかのつ の いたちのおならにぞうのはな ためきの金玉馬のまら 世の中まるふて 上 よしよし

▲いまでの花かた玉七甞じやく 文七いね丸こま三郎 梅しや滝十郎 源之介 勇二郎新車に千之介 世の中まるふて 上 よしよし(二丁表)

▲中のしばいはゑびそくに猿蔵 市川団蔵もいれこます 友吉ひあう

き尾上多見蔵 尾上の菊五郎かさねあふぎ これらはまるがのふても 上 よし〜

▲さて人しれずころしたものがあるといわれてびつくりし たつに たゝれぬ此ばのしぎ ぎんみきびしきぬいものこ 世の中まるふて 上 よしよし(二丁裏)

▲あやめはきみよりたまわりて より政これをばうやまひて まとも するのはおそれおゝいと まいよき〜茶うすと 世の中まるふて 上 よしよし

▲よめいりしたさにおもとのようじ二 もとりねこふたたんじやう石 ゑんづきさへもわからぬ内に あんさんねがふはきはやり 世の中 まるふて 上 よしよし(三丁表)

▲かぶきのやくしやのもんづくし いねとつるとは京ますや 桐はよしを二大吉やくるま 山下金さく丸まいぎゝ みな〜まるふて 上 よし〜

▲下女のおなへはつまみぐい よさはよいからいねむるし ねまへ はいればいひきとねごとで おまけにぶつ〜へをたれる よとつし になやか 上 よし〜(三丁裏)

▲見つけられたるふたりが冥は あからむ月二は玉つさぎ 雪^{ゆき}やこほりとつもりし中も とけてさくらの花ざかり 世の中丸ふて 上 よし〜よし〜

▲引かひかぬは二てうのゆみ ひかねばわからぬ三十三間堂^{さんじゅうさんげんどう} したり やしやりとしてふり立て あふはないぎか手きはぞや とり持しつほ

り恋のく 世の中丸ふて 上 よし〜よし〜

下(弓矢の絵入・四丁表)

▲はるのはじめはかゞみもち だい〜みかんはほつらいさん 大ぶく梅ぼしぞうにもち 大しんのつゝぎりいわひばし みな〜まるふて 上 よしよし

▲つゆもあきかときはいま あめがしたしるてりふり人形 三日てながれるてつげだして 三ツしてくれとおもしろい 世の中まるふて 上 よし〜(四丁裏)

【所蔵番号】加藤家文書 A-8 2979-6

【書名】『鯛づくし事 上の関ぶし』

【形態】小本一冊(十五・〇×十一・二cm)

【行丁数】六行四丁(二丁表を除く)

【丁付】なし

【版元】堀江稲荷御旅前 歌久

【作者】月亭生瀬

【翻刻】

堀江いなりおたび前 歌ひさ板

月亭生瀬新作

本てうし 大新ばん 鯛づくし事 上の関ぶし 上(二丁表)

▲これな舟人。こんどののぼり二 たいよかたい まつていゑぞへ。むまひこぶ たいよかたい どうするたい こうするたい あり

加藤家文書
A-8
2979-6
商史研究所



がたい

▲ことしやほうねん。ほにほがさいて たいよかたい いせへさんぐも。あれいちに たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい(二丁裏)

▲ぬしにあをとて。まへたれがけて たいよかたい のきにきりこは。つられいる たいよかたい とつするたい こうするたい ありがたい

▲かくすこいじは。しやうぎのこまよ たいよかたい おふて人めで。ふあしらい たいよかたい どうするたい こうするたい あり

がたい(二丁表)

▲こめでしたさけ。どくじやといへば たいよかたい まもおかゆも。たべられぬ たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい

▲すいなとりなり。何やくしても たいよかたい いろはゑんざが。きくのつる たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい(二丁裏)

へすもぶがすぎなら。こつてもみやれ たいよかたい やがてなるぞへ。上の関 たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい

い へわたしやあいたい おかほが見たい はなしきゝたい。きかしたい。 どうするたい こうするたい ありがたい

下(鯛の絵入・三丁表)
▲まちごうた。ちごた。 たいよかたい もゝにうぐひす。きかちごうた たいよかたい どうするたい こうするたい ありがたい

い ▲ふるの中からたきひと。くどきや たいよかたい あかもおなごも。おちにくい たいよかたい 道するたい 孝するたい ありがたい

▲のらのはじめを。しばいと出かけ たいよかたい ならいかけたる。いろは茶屋 たいよかたい どうするたい。こうするたい ありがたい

▲ゆびをかそへたおどりのよさも たいよかたい すぎてほいない。ふたりなが たいよかたい どうするたい。こうするたい。ありがたい(四丁表)

▲はなはよそにて。なばかりによぼ たいよかたい まへがうづきの。よしのやま たいよかたい どうするたい。こうするたい。ありがたい

▲ふじのゆめみて。かなしむむすめ たいよかたい いまにもどらぬ。まつしまや たいよかたい どうするたい。こうするたい。ありがたい(四丁裏)

まずは、版元について述べておきたい。住所は「堀江稻荷御旅前」と明記されているものの、フルネームでの記載がない。「歌久」なる版元については、現在のところ、この二書以外の刊行物を見出していない。荻田清氏は、「上方の咄家と天保・幕末期の流行唄(上)」で、薄物の版元について次のように述べている。

京都では、流行唄の板元、例えば阿波屋定次郎は草紙屋より更に見下された小草紙屋と呼ばれており(宗政五十緒氏の『近世京都出版文化の研究』)、物の本からみれば紙屑に等しいといえるものであり、使い捨てにされたことは当然予想される。

簡易な彫り、摺り、製本からみても、読み捨てられる運命の刊行物であったことは間違いないであろう。従って、版元が「にわか版元」であつてもおかしくはあるまい。

次に作者について触れておこう。月亭生瀨に関しては『落語家事典』（一九八九年、平凡社刊）の項目が最も充実しているので次に引用する。

本名未詳

生年未詳／＼没年未詳 享年未詳

名前の読みは、『絵本おとし噺』（仮題。圓馬改白毛舎猿馬・序）の振り仮名により「つきていいくせ」であることは疑いなく、後年桂文都が桂派に対抗して月亭を名乗ったという以前に、この亭号の使われた例が確認されることになる。

はじめ初代桂文治の門人で幾勢といい、兄弟弟子の文来・文東などに混じり、甲乙つけがたい噺家であったというが、途中で廃業したらしい。

その後は著述家として活躍。師文治に噺の材を提供し、後世に残る文治の噺の過半は彼の作意によるものだという。半紙本『大寄噺の尻馬』に名が見える桂亭生世も同人と思われる、小本『大寄噺の尻馬』の代表作者として知られる。落し咄や尽し物の戯作をよくし、『落噺千里敷』の校合をはじめ幕末上方の噺本に深く関わるほか、流行唄の替歌作者として、また『風流俄選』などの俄の作者としても知られる。さらに万延元年（一八六〇）竹田芝居の『五天竺』には、狂言作者の連名にも名を連ねている。

彼の作品はプロの咄家に直接・間接の影響を与えており、実演者としてではなく落語作家として、上方落語史に銘記すべき人である。

あろう。また、上方五代目桂文治の名跡を預かったともいわれる。

『大寄噺の尻馬』は半紙本・小本ともに岡雅彦編著『近世咄本集』（一九八八年、三弥井書店刊、伝承文学資料集成 第十四輯）に全翻刻と詳細な解説が収められている。本書は、それまで薄物で販売していた落とし咄、おどけ軍談、その他雑多な滑稽物を小冊子に仕立て直して売り出したもので、内容から半紙本は天保期に、小本は嘉永頃に売り出されていたことがわかるらしい。伝存本の様相から、かなり読まれていた本のように、月亭生瀨は上方の人々にとって落とし咄の作者として広く知られていたのであった。

『落語家事典』に「流行唄の替歌作者」とあるものの寄席で歌われた流行唄の作者はほとんどが現役の咄家で、筆者自身、月亭生瀨作の流行唄はこの二書以外には見出してはいない。ただし、これらは基本的に読み捨てられるのが原則であるから、版元である歌久がどれほどの薄物唄本を版行したのか、月亭生瀨がどれほどの作品を手掛けたのかを簡単に述べることはできない。しかし、寄席に近いところにいる月亭生瀨が、咄家に流行唄を提供したことは十分考えられるであろう。

これら薄物唄本には刊年が明記されていないものがほとんどであるが、内容が「今」を取り入れているため、発行時期が特定できる場合がある。『芝居よし／＼ぶし事 因州ぶし』には「ねんごぶあんせい」とあらたまりて 卯のとしがさね二めでたさは」とあり、本書が安政

二乙卯年に出されたことがわかる。体裁、版元、作者が同じで、ともに加藤家に旧蔵されていたことから、『鯛づくし事 上の関ぶし』も同時期に版行されたものとみてよいだろう。

書名に「芝居」とあるように、『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』

には、当時の歌舞伎界の情報が盛り込まれている。「いまでの花かた玉七 翫じやく 文七いね丸こま三郎 梅しや滝十郎源之介 勇二郎新車に千之介」とあるのは立役の初代中村玉七、二代目中村翫雀、四代目中山文七、初代三枅稻丸、初代中村駒三郎、初代三枅梅舎、二代目市川滝十郎、二代目三枅源之助、若女形の初代実川勇次郎、初代市川新車、中村千之助である。この時代、将来が囑望されていた上方の若手役者たちであったが、このうち、玉七は安政七年に二四歳で、翫雀は万延二年（一八六一）に二八歳で、稻丸は安政五年に二五歳で、源之助は彼らに比べると「若手」とは言い難いが、安政七年に四三歳で亡くなっている。役者絵にも数多く描かれている役者たちなので、彼らが生きていたならば、幕末から明治の上方歌舞伎界はもう少し華やかであつたらうと残念に思われてくる。

また、「中のしばいはゑびそうに猿蔵 市川団蔵もいれこます 友吉ひあつき尾上多見蔵 尾上の菊五郎かさねあぶぎ」とあるが、ここに出てくる五代目市川海老蔵とその四男の初代市川猿蔵、六代目市川団蔵、三代目藤川友吉、二代目尾上多見蔵、四代目尾上菊五郎はすべて、安政二年正月と三月に、大坂道頓堀にあつた芝居小屋、中の芝居（中座）に出勤していることが役割番付で確認できる。海老蔵は七代



二代目広貞画 中判錦絵
嘉永7年(1854)8月 中の芝居
「児雷也豪傑譚話」
市川猿蔵の児雷也
(阪急学園池田文庫所蔵)

目市川団十郎のことで、天保の改革により江戸追放の憂き目に遭い、前年には名古屋から大坂へ来て、中の芝居で息子たちと同座する予定であつた。しかし、八月六日、長男の八代目団十郎が大坂で謎の自殺を遂げてしまう。享年三十二歳。人気絶頂であつた役者の死に際し、江戸では数多くの「死絵」が版行されている。死絵とは死に装束や役の扮装をした姿に、没年月日、墓所、戒名、享年、辞世の句などが記載された浮世絵である。死絵の数は八代目団十郎が一番多く、三百種を超えているという。八代目団十郎は、江戸で人気を取った「児雷也こづわいをあが豪傑譚話」と「与話情浮名横櫛」に主演する予定であつたが、急遽、弟の猿蔵が代役を務めることになった。そして、この後も海老蔵と猿蔵親子は大坂の地に留まり、翌年にも中の芝居に出勤したのであつた。しかし、この猿蔵も『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』が出

された年の九月十九日、大坂の地で二二歳という若さで病死してしまふ。七代目団十郎は、役者としての事跡はもちろんのこと、それまでの家の芸を大成して「歌舞伎十八番」を制定するなど、歌舞伎史に名を残した人物である。しかし、天保の改革での江戸追放や、子供たち先に先立たれるという不幸を経験している人物でもある。なお、団十郎の名跡は、その後、河原崎家へ養子へ行っていた五男が九代目として襲名することになるのである。

続く歌詞の「友吉の檜扇」と「尾上多見蔵、尾上菊五郎重ね扇」は、ともに各役者の紋である。歌舞伎役者は、名前の他に、俳名、屋号、紋を持ち、歌舞伎通はこれらを熟知しているのであった。別のところでも「かぶきのやくしやのもんづくし いねとつるとは京ますや桐はよしを二大吉やくるま山下金さく九まいざ」とある。これは、三柎稲丸の屋号は京柎屋、紋は鶴で、二代目中山よしをは三代目中山一徳の前名で紋は桐、三代目中村大吉の紋は矢車、四代目山下金作の紋は九枚笹であることを指している。

『綱づくし事 上の関ぶし』にも歌舞伎役者に関する唄がある。「すいなとりなり。何やくしても たいよかたい いろはもんざが。きくのつる」とあるのは、初代実川延三郎のことで、『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』一丁表に載る右の頬被りした人物は、同時代の役者絵を見慣れている立場からしても、和事を得意とした延三郎を映しているように見える。後に二代目実川額十郎となって、上方歌舞伎界のトップスターとなるが、眼病を患った後に失明して、慶応三年（一



二代目広貞画 中判錦絵
嘉永6年(1853)3月 中の芝居
「仮名手本忠臣蔵」
実川延三郎の早野勘平
(阪急学園池田文庫所蔵)

八六七)に亡くなる。

最後の「ふじのゆめみて。かなしむむすめ たいよかたい いまにもどらぬ。まつしまや」とある「松島屋」は、二代目片岡我童の屋号である。現在は十五代目が活躍する「片岡仁左衛門」は元禄時代から続いているが、二代目が早世したこともあり、六代目までは名跡預かりなど不安定な名前であった。しかし、七代目が復興した後、今日まで続く名跡となったのである。八代目を継ぐことになる我童は、七代目市川団十郎や二代目嵐璃寛の門人となった後に、七代目仁左衛門の養子となった。初代我童を経て、二代目我童となった天保十年代以降、多くの役者絵に描かれる人気役者となっていたのである。この薄物唄本が出された前年に江戸へ下り、安政四年に八代目仁左衛門を襲名する。大坂で没した八代目団十郎に面差しが似ていることから江戸



二代目広貞画 中判錦絵
 嘉永6年(1853)1月 角の芝居
 「景清曾我賑不尽」
 片岡我童の曾我十郎
 (阪急学園池田文庫所蔵)

でも人気が出て、その後、文久二年(一八六二)十月に帰坂するまで上方を留守にするのである。江戸へ下つてすぐにも関わらず、この薄物唄本では「今に戻らぬ」と嘆いている。端正な顔立ちから女性ファンが多かった我童の人気が読み取れる歌詞である。

この他、芝居の演目でお馴染みの世界も登場する。『芝居よし〜ぶし事 因州ぶし』の「あやめはきみよりたまわりて より政これをばうやまひて まともでするのはおそれおゝいと まいよさ〜茶うすとり」は、源頼政の鶴退治を題材にした「頼政鶴物語」を、「つゆもあきちかときはいま あめがしたしるてりふり人形 三日でながれるてづけだして 三ツしてくれとおもしろい」は、本能寺の変で織田信長を討った明智光秀こと武智光秀を主人公にした「三日太平記」を下敷きしているのである。

以上、加藤家文書に残る薄物唄本の紹介をしてきた。これを手元に置いた加藤家の人々は、一五〇年以上経た現在、大学の博物館に収蔵されるとは夢にも思っていなかったであろう。これらは、読み捨てられてしまふ儂い出版物であった。近世の芸能や浮世絵を研究していると、同時代の人々が決して残すべき芸術だと認識していなかったことが理解できる。現存している片々たる資料を目前にしていると、これらが今日まで残っている偶然に感謝する気持ちが溢れてくるのである。今日、赤字行政のツケから、博物館や文学館などの閉館が取り沙汰されている。所蔵資料を捨て去ってしまうのは容易いが、今日まで残ったものの運命をそう簡単に決めて良いものであろうか。佐古文書をはじめ、今回紹介した加藤家文書、その他様々な資料を所蔵している大阪商業大学商業史博物館の姿勢には頭が下がる思いである。そして、「大阪」に注目して収集している博物館の今後にも期待したい気持ちがいっぱいである。

【付記】本稿は、平成二十二年度科学研究費補助金基盤研究(C)「上方浮世絵展企画に向けての国内外所蔵調査と作品の基礎的研究」(課題番号22520113)の研究成果の一環である。

